e ラーニングの手法を用いた美術史学習の方法

新　井　義　史
北海道教育大学岩見沢校

The method of art history study using the technique of e-learning

YOSHIFUMI ARAI

１、はじめに

再編後の岩見沢校芸術課程には、美術史および美術理論の授業がカリキュラム上は多く設定された。しかしながら、美術コース学生の理論系科目の受講状況は芳しいとは言えず、また美術史に関する学生の知識レベルが不十分であることも指摘されている。そもそも美術史・美術理論の領域は、ある程度の基礎知識が備わっていないことには興味・関心すら湧かないものである。入門的・概論的内容の授業設定や、学習意欲や動機付けのための授業内容の工夫が求められている。

理論科目の実施に関しては、現実的な問題として時間割の面からも困難がある。最も学習を必要とする１～２年生の時間割はすでに実技系の授業で埋められており、理論系の授業を配置する余裕が無い。

岩見沢校芸術課程のカリキュラムには、通常の授業では実施困難な内容を実施するための「プロジェクト科目」という名称の授業枠がある。この科目は、時間割外に設定することを原則にしている。今回の実施内容は、この制度を活用し、さらに「e ラーニング」の手法を採り入れることで、不足する学生への美術史学習対策となりうるかを検証したものである。

授業のタイトルは「e ラーニング風西洋美術史（古代・中世編）」とした。内容としては、西洋における古代から中世までの芸術活動の変遷紹介が中心である。原始芸術から始め、エジプト・ギリシャ・ビザンティン・初期中世・ロマネスク・ゴシックの主要な表現様式の特徴を説明する。そこにおいて、写実的･象徴主義的･幾何学的の３種の異なる表現傾向が、いかなる形で現れたか、その変容と変遷とを概観する。

授業の大きな特徴は、古代から中世に至る西洋美術を、社会学の立場をベースに解説することである。芸術理解には、文化史的観点、心理学的観点、造形史的観点など種々のアプローチ方法がある。古代・中世の芸術は、近代以降とは異なり社会の構造や権力者の意向に強く制約された。したがって、その解説に際してはアーノルド・ハウザーの「芸術の歴史」を指針にした。（註１）

１回の授業には、３～４種の興味深い話題をテーマに採り上げ、１テーマ 20 分程度の解説を行った。それぞれの表現様式の特質を最も喚起するようなテーマを探し出し，それらを組み合わせて授業を構成した。

美術作品の図版を扱う授業の性格上、全てパワーポイントを使用して、大量の写真・解説図版・短編に編集したビデオを活用した。

２、目的と方法

本稿の目的は、オンデマンド VTR 視聴による美術史学習の方法を検証し、その効果を確認することである。

「オンデマンド」(On Demand) は、1990 年代中頃に広まった用語である。ケーブルテレビ網や光ファイバー網にコンピュータシステムを組み合わせて、個々のユーザの要求に

合わせて、見たいときに見たい映画を放送する「ビデオオンデマンド」(VOD：Video On Demand) システムが注目されたことによる。

大学で行なわれている「授業 VTR（授業を撮影した動画)」は、すでにインターネットを介して公開されたり、e ラーニングの学習材料の一部としてオンラインで提供されている。(註 2)

e ラーニングといえば、通常は LMS（教材作成・登録・管理・掲示板機能・レポート提出機能などを備えた学習管理システム）により運営されるオンラインサービスのことを言う。時間的・場所的な制約を受けないことが e ラーニングの最大メリットである。

e ラーニングは、本来的には遠隔教育を実施する手段としてのツールである。しかし、ここでは通常の対面授業を補完する目的で、その手法の一部を組み合わせ、LMS を用いることなく実施した。

今回は、e ラーニングで通常用いられている様々な方法のうち、①授業 VTR のオンデマンド視聴と、②「メールによるレポート提出」との２種類を組み合わせて実施した。

使用したビデオ映像は、2004 年度に釧路校で実施した 7 回分の講義を授業記録の目的で録画したものである。(註 3)

今回は、その授業ビデオ画像とパワーポイントスライドを、専用ソフトを使用してシンクロ（同期）させて DVD に収録した。そのため、受講者のパソコンの画面の中で、実際に教室で行なわれた授業にきわめて近い状況をヴァーチャルに再現出来るようにした。

受講生は授業に出席する必要は無く、自分の都合の良いときに一人で DVD を視聴することで学習を進めることができる。しかし、この方法によれば、正課授業の外で時間割の外で展開しうる反面、独習に近い形になる。通常の対面授業に慣れている受講者にとっては、教室における教育活動抜きの授業実施には、人間的な関わりの欠如と言う面に違和感を感じることだろう。したがって、授業担当者と受講者との双方向性、受講生同士の共同あるいは相互性、それを担保するための工夫が必要になる。

そこで、学習意欲を持続させるための配慮として、メールによるレポート提出に「相互作用効果」の役割を持たせた。具体的には、毎週提出されるレポートへの添削とコメントの記入、そして全員分の提出レポートを一覧できる形に編集し、速やかに受講者に一括送信した。これにより、個別に行っている学習活動が場所を隔てながらも、２ヶ月の間、同時期に受講者全員で進めている連帯意識・実感を持たせられるだろうと考えた。

本稿では、受講者が自由記述した授業感想文をもとに、これらの効果を検証した。

３、授業実施方法と教材

(1) 事前準備

①案内掲示：掲示期間 7 月 25 日～８月 12 日、受講対象者:芸術課程（美術･芸文･音楽）２･３年生、人数制限なし

②受講申込：指定場所の申込用紙に記名、申込締切り８月 12 日

③授業データ配布：受講申込者は、全ての授業データが入った DVD-R：1 枚を指定場所に出向き受領する（8 月６～ 20 日の間随時)。

(2) 授業実施

①授業実施期間：2008 年 9 月 1 日～ 11 月２日の２ヶ月間。全 7 回（1 回約 90 分）で構成。

②受講学生の活動

1) 授業視聴：１回の教材視聴は月曜～日曜の１週間、受講者は各自の都合にあわせてパソコンで視聴する。

毎回課題の提出：毎回の指定期間内に下記 2 点をメールで送付する。

A) 感想（300 ～ 500 字）

B) 疑問 1 点

(初回の例：9/01 ～ 07 の間に、第 1 回分の VTR を視聴し、その授業内容の感想・生じた疑問をメールにて送付する、ただし、期限に遅れそうな場合には期限前に提出可能、期限後は一切受けとらない)

2) 最終課題：7 回を視聴し終え、全体を通した感想（1000 ～ 2000 字）をメール送付。

3)A 課題（評定 A をとるための課題）：各自が毎回提出した疑問の中から１件を選び、自分で調べ疑問点を解明する。(2000 ～ 10000 字)

③授業担当者の活動

1）毎回課題・最終課題のメール処理

専用のメールアドレスを、通常使用のメールと混在しないよう、G メールを利用して設定した。

受領したメールは、記載内容を一旦 EXCEL にコピーし学生番号順にソート。受講者全員の感想文を In Designin を用いて、A4 サイズ２～3 枚にレイアウトする。その後、4 ～５名をピックアップして添削を行う。それを PDF データに変換し添付ファイルにして、締め切りの翌日中に全員に返信する（全員分一括送信）。

2）評価

評価方法は当初以下のように周知した。

・7 回分＋最終課題＝評定 B
・6 回分＋最終課題＝評定 C
・5 回分以下＝不合格
・評定 A については前述した

5 回終了時点（10/13）で、その時点までの課題提出状況をリストにして送付した。
全回終了時（11/03）の課題提出状況および評定結果をリストにして送付した。

(3) 配布 DVD －R のデータ内容

DVD －R の内容構成は、図１のようである。操作の際には、■ＳＴＡＲＴ（図 1-①)、■西洋美術古代中世(図 1-③)の順にクリックする。目次ページ（図２）の見出し文字を選ぶことで、各チャプターを視聴する画面（図３）が表示される。データ量は１ＧＢ以下であった。

(4) オンデマンド VTR の作成

①授業の撮影

デジタルビデオカメラ（ＤＶカメラ）を三脚を使用して授業を固定撮影する。60 分テープを LP モードで使用。

②キャプチャー・エンコード

１）撮影済みテープを DV カメラで再生し、Windows ムービーメーカー（Windows Movie Maker）を用いて動画キャプチャーする（実時間が必要)。
２）視聴しやすくするために、１回分（90 分）の授業を５～８のチャプターに区切る。１チャプターを５～２０分で再エンコードする（実時間の半分程度を要する)。

③動画とスライドの同期

Microsoft Producer を使用して、授業ビデオ（動画）と PowerPoint プレゼンテーション（スライド）を同期させる。作成されたファイルは、Web ブラウザで開いて視聴することができる。**（註 4）**

④目次ページへのリンク作成

1）見出しページを目次ファイル（HTML ファイル）として作成し、各チャプターに分かりやすいタイトルを付ける。
２）Producer により作成された同期データをタイトルにリンクさせる。

(5) 視聴方法

DVD-R に収納されたデータは、Windows Internet Explorer および Windows Media Player を使って、動画と音声と解説スライドとをシンクロさせて再生する。したがって、視聴者側のパソコンにそれら WEB ブラウザ等の環境が整っている必要がある。パソコンが MAC の場合でも視聴可能との記述も見受けられたが、確実な再生が確認できなかったため、今回は「Windows 環境でのみ視聴可能」ということで受講者を募集した。

(6) 視聴時の画面表示

視聴時の画面表示は図（3）のようである。
画面全体は大別すると３つの部分に区分できる。

①動画 VTR 表示部

動画サイズは 320 x 240 ピクセルで、左上部分に表示されるよう設定した。

②スライド表示部

右側に表示されるパワーポイントスライドは、可変サイズに設定してあり、任意に拡大縮小可能。通常サイズでも画像は極めて精細に表示される。

③動画・スライド操作部

動画表示下部には、左から「再生 // 一時停止」「前へ」「次へ」「10 秒巻戻し」「10 秒早送り」「音量調整」の６つの機能ボタンがある。さらにその下には､「スライド選択」スペースがあり、パワーポイントスライドが全て順に表示されている。スライドを選択することで、希望する動画とスライドの位置へ移動できる。

４、課題提出と評価

(1) 受講者の状況

美術コース 11 名､芸文コース 9 名の計 20 名。全員が最後まで受講を継続した。

(2) 課題提出状況

①「毎回課題（各回の感想文）」

７回全部提出者 13 名、１回未提出者７名。

提出状況は、夏季休業中（第４回まで）より後期授業開始後の方が提出状況がやや悪かった。毎回課題の提出基準は、７回のうち６回以上の提出を求めた。5 回以下は不合格と明示した。結果は、全員がその基準に達していた。

②「最終課題（全体の感想）」

最終課題の提出者は 16 名。未提出者が 4 名いたが、これは最終課題未提出の場合の扱いを明示しなかったことにもよるであろう。提出物に関しては、明瞭な指示の必要を感じた。

③「A 課題」

提出者２名、未提出者 18 名。

アドバンス課題としての「A 課題」では、感想記述とは異なり「調べ学習＝疑問とその解明」を求めた。5 名程度の提出を予想したが、２名のみであった。「最終課題」「A 課題」共に、期間設定が短すぎたと考えられる。

(3) 単位認定

当初設定した評価条件を適用したところ、４名が単位不認定となった。そこで「最終課題」･「A 課題」の提出〆切期間が短かすぎたことを配慮し、評価基準を少し変更して、全員を単位認定した。Ａ評定２名、Ｂ評定 15 名、Ｃ評定３名の結果となった。

５、メールによる課題提出について

(1) 提出方法

３種類の課題は全てメールを使用して提出するように指示した。メール提出できる者のみが受講申し込みをしたものと考えられ、受講申し込み時にメール提出を問題にしたものはいなかった。ただし、前半の夏休み期間に実家へ帰省のためメールアドレスの一時変更が 2 名、その時期のみ携帯メールを使用した者が 1 名いた。

(2) 送付時間

メールの送付時間は、締切りの２日前から締切り当日に集中した。その中で夜 23 時から 24 時にかけて駆け込み提出する者が毎回５～６名いた。早めに送付するよう度々指摘したものの改善されなかった。これは個人の習慣の問題であろう。

(3) メールに関する受講者の意見

提出物をメールにて提出する方法に関しては、次のような意見があった。

(A)「感想をメールで済ませることができたのでとても楽だった。」

(B)「大学に行かなくても提出できるので便利だった。」

(C)「夏休みの期間中、自宅・実家にいても提出できて良かった。」

６、添削と全員分一括送信による相互作用

(1) 感想文の扱い

感想文の分量は 300 ～ 500 字とし、自分で文字数をカウントして記載させることで、分量を意識化させた。ほとんどの提出文は 350 ～ 450 文字程度であった。この分量は感想文として適当であったと考える。

(2) 添削と全員分一括送信

授業担当者と受講者との双方向性に配慮し、「添削」と「全員分一括送信」とを行った。「添削」の内容としては、「質問」に対する応答、文章表記に関する注意、補足などを行った。全員分一括送信は、受講者同士の共同あるいは相互性を意識させることを目的にした。

⑶ 相互作用への受講者の意見

授業担当者からの添削・一括送信に関しては、次のような意見があった。

(A)「感想への添削や一括送信は、自分が使っているおかしな日本語がどこなのか分かるし、全員が全員の感想を読めて気が引きしまる。」

(B)「自分の文と他者の文を読み比べることによって文を書く上で参考になる」

(C)「添削された受講生の感想を読めるというのも魅力的だと思います。あまり話す機会が無い人の意見も知ることができます」

(D)「私の感想は、他の受講生と視点が著しく違う場合が多く、とても参考になります」

(E)「感想と疑問点を挙げるという課題は、こうした意識をもって鑑賞すると、今までとは違った見方をする自分に気づく。決して暗記や知識を売ることを前提に学ぶのではなく、常に何かを感じながら能動的な学習が出来た」

(F)「全員分の感想と文章の添削メールは、毎回とても楽しみにしていた」

④添削の具体例

（下線は添削時に付けたもの。コメントは下線付ゴシックで表記した）

＜添削例１：文言・言回しに関する指摘＞

0000 （氏　名） 第三回　エジプト　ギリシャ

（A）感想

エジプト美術は、権力者の墓の為のものだという事、生産の標準化を目指し形式化されていた事という今では見られない概念でできていた。芸術の目的が異なると特種な表現方法になるのだと思った。

ギリシャ美術は概念の変化がはっきりと解る文化だ。私はコントラポストに向かっていく彫刻の変化が興味深いなと思った。初期の、エジプトに影響を受けた正面性を持つ彫刻も丁寧で美しい、また、クラシック期の量感を持ち動きが感じられる彫刻は作者の造形思考を思わせる。スポーツ選手を題材としていたクラシック期前半は良い印象を受ける。ギリシャの文明は洋式（→様式）が沢山あり地域も異なる、混乱しないように区別をしっかりと付けなくてはと思った。

ギリシャ美術に移るとエジプト美術は本当に特種なものだと感じた。

(326) **（用語の使い方に違和感を感じます。まずは普通の表現をしてみてください）**

（B）疑問

エジプトの彫刻が（→は）記念碑（＋的）であったが、ギリシャ彫刻は記念碑という意味合いが薄い。彫刻の用途の変化が何故おこったのか。**（スポーツを表した彫刻には記念碑的なものが多くあった事は説明したはずです）**

＜添削例２：質問への回答、補足＞

0000 （氏　名） 第６回　初期中世美術

（A）感想

イコンの前で祈ることがなぜ偶像崇拝にならないのか以前から疑問を持っていましたが、イコンが神の世界に開かれた窓になる決まりがあることを知り納得しました。

ケルト、ゲルマン美術は工芸的だということです。しかし、これまでの美術も王侯や神のためであったり制度的には工芸的であったように思うので、工芸的、というのが具体的にどのような物を指すのかは少々ピンと来ませんでした。日用品の装飾として使われている、という点でしょうか。**（＝移動民族なので、芸術活動の中では絵画･彫刻よりも工芸品が発達した、ということをお話したつもりです）**それにしても特にゲルマンの装飾模様は緻密で現代でも十分にファッショナブルだと感じました。

ケルトの兜がキャラクター的な形でしたが、あの兜をかぶって剣を振るっていたのかと思うと複雑な気持ちです。**（＝現代のキャラクターが、過去のスタイルを参照したり模倣しているわけですね）**

「創造的な絵を描きたいとは思わないか」と修道士にインタビューする場面がありました。同じようなものを描いているようにみえても、その時々の心の有り様はいつも違うことに意味があるのでしょう。（３９３文字）

（B）疑問

彩色写本がとても鮮やかな色で驚きました。当時の印刷、またインクはどのような物を使っていたのか、もっと調べたいと思いました。

７、オンデマンドへの反応

今回の授業形態は、授業時間割外の個別学習である。２ヶ月の期間、毎週定期的な課題提出が求められているとはいえ､授業 VTR の視聴は、受講者個人のスケジュールに委ねられている。

時間的・場所的制約を受けないことは、結果として学習効率を散漫にさせる要素があると危惧した。しかし、受講者から寄せられた意見は大別すると以下の４種類のように肯定的なコメントが多かった。①～③は当初から予想していた意見であった。対面授業より「④集中して受講できる」という感想は予想外であった。

①他の授業と重ならない　(A)
②自分のペースで進められる　(A) (B) (C)
③再確認できる　(D) (E) (F)
④集中して受講できる　(G) (H)

(A)「他の授業や予定と重ならずに、家で好きな時間に好きなだけ視聴でき、感想を送るというのがとても魅力的で都合が良かった。

(B)「自由な時間に視聴して講義を聴くことができる形式は、自分のペースで講義内容を理解していくことができて良かった。

(C)「空いた時間に少しずつ視聴できる点が良かった。

(D)「聞き逃した言葉やもう一度確認したいときなどに便利だった。

(E)「気になるところは巻き戻したり自分で資料を調べたりしながら受講できたので自由度が高かった。

(F)「気になった部分や興味を惹かれた部分は何度でも巻き戻して見ることができたり、止めておけるのは便利だった

(G)「通常授業と比較してのメリットは、常に集中して講義を受けることができる。

(H)「通常授業では、目が覚めたら講義が終わっていたなど、毎回常にずっと集中することは難しい。しかし､眠かったら寝ればいいし、気になることがあればそっちをやってからでもいい。そのような自由な講義であるので、常に集中する事がそんなに難しい事ではないように思う。

８、授業内容の理解

(1) 実施授業のポイント

制作することに強い関心を抱いている学生には、「芸術」とは作家個人が思い思いの表現の探求に向かうものと理解している者が多い。たしかに近・現代の芸術は個人の考え方や姿勢を基盤にしており、そこではロマン主義に始まる個性的な美意識を優先させた芸術観が存在する。しかし、19 世紀以前の権力者や特権階級に奉仕する目的で制作された作品や、民衆の間で愛された実用的な工芸品への理解を抜きにしては正当な芸術理解とはいえない。

この授業は主として、古代から中世までの西洋美術の大局的把握、芸術活動と社会・宗教・歴史との関連性の意識化の２点にポイントをおいて内容を構成したものであった。個々の作品の造形的な関心よりも表現様式に底流する一貫した志向や、民族性の違い、歴史の動向を通しての表現活動の変遷などとの関連の中で芸術がいかに存在してきたのかに視線をあてた。

「最終課題（7 回の授業 VTR を視聴し終えて全体を通じての感想)」に記載された文面の中から、授業内容の理解に関係する箇所を以下に抜粋した。

①通史的理解、②社会・宗教との関連、③歴史との関連、④現代と関連させる視点の、4 種類に分類して示した。

(2) 授業理解に関する受講者の意見

（下線は筆者）

①通史的理解

(A) <u>原始芸術からゴシックまでの価値観や、文化はぶつぶつと途切れるわけでなく、必ずどこかが繋がっているように思った。</u>創造的で、今の私たちでは想像できない意味合いが込められた古くから続いてきたものが、今の私たちが理解しようとしている世界と繋がっている事がとても不思議でしょうがない。

(B) <u>今回の授業を通して強く感じたことは、芸術とは途切れることなく次の時代に脈々と受け継がれていっているということである。</u>
今までの自分の勉強の仕方では「原始」なら「原

始」。「中世」なら「中世」と、それぞれの時代の繋りがあまり感じられない虫食い状態の勉強をしていた。

しかし、今回の授業と自分での更なる研究課題によって、人々は何かを作るときには必ず既にあるものを参考とし、そこから新たな芸術が発展しているのだということを改めて感じた。

(C) この授業を受講する前は、様々な美術様式のそれぞれを単体として、部分として理解していて、それらの様式同士がどう関わり、繋がっているのかをうまく想像できていませんでした。今回の授業で通史として古代・中世美術の全体を俯瞰してみる事ができ、大まかな美術様式の流れや関わりを知る事ができました。それぞれの美術様式がどういう流れにそって、どういうものを汲んでできあがってきたのか、また衰退していったのか、また、全体からみてそれぞれの美術がどのような位置づけになるのかを理解する事ができてよかったです。

(D) 何千年も前から多様な環境の中で様々な目的の芸術作品がつくりだされ、中には今も受け継がれているスタイルがある。人の創造性は計り知れず、本当に驚くべきものだ。芸術はその時代の時代背景や情勢をそのまま反映してつくられていっていると強く感じた。

(E) 美術の教科書の写真などで見たことがあって、つくられた時代や場所もよくわからずに、何となく覚えているといったものもいくつかあったのですが、今回の講義でそれらを自分の中でまとめられたと思います。時代の流れをつかむだけではなく、エジプトやギリシャなど、様々な地域の美術作品も見ることができ、また、自分自身の視野も広げることができて、非常に充実した講義でした。

(F) 西洋美術史の誕生から中世美術（ゴシック建築）までの流れとそれぞれの美術様式の特徴や成り立ちを分かりやすく学ぶことができ、西洋美術史に関しての知識があまりなかった私にとっては大変有意義なものとなりました。また、講義の中のスライドでは初めて見る美術作品の写真も多く紹介されていたので、興味を持って学べたと思いました。

②社会・宗教との関連

(G) 美術というものは、個人の精神ではなく社会に存在するものなのだと感じました。何故なら、どの時代に於いても美術の形態は社会情勢に左右されるからです。美術は鑑賞して楽しむものだという認識も、現代だからこそ有り得る発想だということです。

(H) 土地の風土や暮らし方、政治の行なわれ方等の環境と、民族性によって様々な美術の形が生まれた事がわかり、絵画でも工芸でも建築でも、美術作品にはそれを作った人達の性質や特徴がはっきりでているような気がしました。

(I) 全体を受講し終えて西洋美術史の古代から中世の概要をよく把握することができたと思う。中世アートでは教会権力や市民の財力など社会の背景がよく反映されていると感じる。ことにキリスト教、ひいては芸術自体が美術だけでなく私たちの社会や文化に多大な影響を与えている事に改めて感じ入った。

(J) 時代ごとに表現の様式が違いますが、どの美術においても神という存在から切り離して考えることはできないということを全体を通して感じました。今回の芸術プロジェクトを受け、人と宗教、そして芸術との関係についてもう少し深く考えてみたいと思いました。

③歴史との関連

(K)「西洋美術史」という名前のとおり、この授業では美術だけではなく美術を軸とした歴史も学ぶことができた。漠然としか「西洋」のくくりもわかっていなかったので、地図を使っての基礎からの授業は非常に勉強になった。

(L) 原始芸術からロマネスク、ゴシックまでの十三世紀後半、ルネサンスに入る以前の美術の歴史を見てきた。今まで余り触れていない部分の芸術で、歴史と直にかかわり歴史を把握していないと解らないものだった。歴史が重要に感

じたのは、芸術の用途が近代とは明らかに違い、時代を動かした権力者が主に関わっているからだろう。

(M) 高校の世界史の教科書を片手に復習を余儀なくされた。当時の世界史の勉強の姿勢が再度試されたかのようで、後悔と共に自分がこれからせねばならないものが大きな輪郭を持って姿を現した。

(N) それぞれの時代や文化で価値観が変わり、そのつど最適な形となる。その形自体は、時代が変わった今の私達が見ると美しく思えるもの、芸術品と思えるものがたくさんあり、価値観は共有できるものだと思った。

④現代と関連させる視点

(O) 純粋に自分が描きたいものだけを自由に描くことが出来るというのは、今の私達にとっては当たり前のことだ。しかし、芸術の世界において現在の状態がいかに特別で奇妙なことかが、今回勉強してみて始めて分かった。

(P) 今まで私にとって芸術とは、自己を表現したものに限っていたように思う。作家の考えが作品に表れていて、それに共感できるものが自分にとっての芸術であった。そのため、古代・中世の美術は目的があって描かれたものであり、私にとっては「歴史」でしかなかった。だが今回の講義を受けてその考えは変わった。絶対的な信仰が生む芸術のパワー。想像もできないほど昔にあった巨大な芸術の存在に、美術の新しい価値を見出すことができたように思える。

(Q) 美術は一般的に余暇として認識されているが、どんな形であれ美術に救われることもあるだろう。古代から連綿と連なってきた祈りや願いが今後も美術のとして次に伝えていくのではないだろうか。美術史を通して今の私たちの行き方や芸術を見直すことができたと思う。まさに温故知新である。

９、まとめ

(1) 教材としてのオンデマンドＶＴＲ

「動画＝スライドシンクロ画面」のパソコン再生に関しては、受講者からの問題指摘は全く無かった。また、一時停止・１０秒戻るなどの操作がスムーズでストレスを感じさせないとして、受講者の評判はいたって良かった。

動画と静止スライドとのシンクロ画面による方式は、オンデマンド教材の他の方法、すなわち「動画のみによる視聴」や「音声付パワーポイントスライドの自動再生」と比較すると、圧倒的に優れているといえる。

ＤＶＤデータとして一度作成すれば、教科書（テキスト）と同様、以後毎年活用できる。チャプターで区切ってあることから、後で一部を修正したり内容の差し替えも可能である。

LMS（多機能な学習管理システム）を用いてオンラインサービスにより運営する「eラーニング」には、相当の経費と運営スタッフが必要である。

ＤＶＤ配布による「動画＝スライドシンクロ画面」のオンデマンドＶＴＲであれば、授業担当者個人のレベルで実施できるし、なによりも極めて低コストである。そうした観点からも、通常使用の学習教材に適していると考える。

(2) メールによる相互作用効果

今回、最も配慮したことは、受講者の学習意欲をいかに持続させるかであった。オンデマンド学習は、自分のペースで自由にどこでも学習できる反面、制約を受けないことにより、学習動機の欠如をもたらすことが予想された。

途中で興味を失わせない方法として考えたことは、授業担当者と受講者との間のメールによる双方向性である。対面授業の場合でも、出席確認が出席意欲の持続に有効であることは明白である。1週間単位で定期的に提出される感想文に対して、授業担当者が添削やコメントを記入した返信を、メールによりきちんと応答することは、出席確認に相当する大切な活動であることを感じた。

また、メールの一括送信により、20名の受講者全員が、毎週1度文章を通じて授業の感想を共有することの効果は予想以上であった。感

想文の記述からは、意欲喚起や授業継続に大きく役立ったことが伺える。

(3) 美術史学習の方法としての可能性

「何のために美術史の学習が必要なのか」、「自分にとって何の意味があるのか」という実技系学生の疑問に対して、説得力ある説明をすることはきわめて難しい。しかし、今回の試行結果には、「８、授業内容の理解」で採り上げた意見のように、より高い次元から芸術を捉えなおす学生たちの意識がうかがえる。授業内容へのこれらの感想を見る限り、適切な学習機会が与えられた場合には、美術史学習への姿勢の変化を生じさせる可能性がある。

実技系学生の美術史学習の問題は、時間割配置の困難さにあるのではなく、学生の意識を喚起し、自学自習を促すきっかけとなるような、学習内容の精選や方法にあると考える。学生に「教える」「学ばせる」のではなく。「学びたいという気持ちを起こさせる」のは何よりも授業プログラムの内容による。

通常の対面による講義科目でも、一方向的な情報伝達に終始した授業では教育効果が期待できない場合が多い。今回の試行結果から、たとえ対面的要素を欠いたとしても人間的なかかわりのバランスが配慮されるならば、相応の効果が期待できることが分かった。

今回実施した「古代・中世編」に加えて、「近世（ルネサンス・バロック）編」・「近代（19世紀）編」のオンデマンド授業を計画している。

１年生前期（9-10 月）と１年生後期（2-3 月）、そして２年生前期（9-10 月）の期間を使い、これらの授業を一連のオンデマンド方式で受講する機会を設け、そこでの反応をさらに確かめてみたい。

註

註１、アーノルド・ハウザー『芸術の歴史』、1・3、高橋義孝訳 、平凡社、1958 年

註２、例えば、iii online は，東京大学大学院 学際情報学府とメディア教育センターが 2002 年４月に開設したｅラーニング・サイト。東京大学の大学院生が履修して単位を取得できるほか，学外にも一般公開している。ただし、今後の継続性は不透明と言われている。

註 3、釧路校の授業で録画したビデオ映像の活用方法に関しては、新井義史：「WEB 利用による授業記録の公開（１）―学習システムとしてのＷＥＢ活用の方法―」釧路論集第 37 号（北海道教育大学釧路校研究紀要、１～６頁、2005 年 10 月発行）において報告した。「２、レポート提出後の処理に関する試行」では、提出レポートをＰＤＦデータ化し、添削やコメントを記入してＷＥＢに掲載することで、受講学生が自分や他学生のレポートの閲覧を可能にする方法について報告した。「３、講義 VTR の作成とその活用」では、パワーポイントを用いたビジュアルベースの講義形式の授業を、丸ごとＶＴＲに記録しＷＥＢにて視聴する方法と効果について述べた。

註 4、「Microsoft Producer for Microsoft Office PowerPoint 2003」は、動画とスライドを融合させたオンラインプレゼンテーションコンテンツを簡単に作成できる。同社 Web サイトでの無償ダウンロードが可能なほか、PowerPoint 2003 パッケージ製品に同梱される。作成したデータの一部が Web にアップロードできず、スライド表示が不完全であったことから、今回の試行はＤＶＤ－Ｒを配布する方法で行なった。

教授（デジタル絵画研究室）